

ハンガリーの音楽教育 X

コダーイの音楽教育の実録（3才～6才）

（1983年ブタペストに於て）

MUSIC EDUCATION IN HUNGARY X

The document on music education by kodaly zoltan (age3～age6)

—1983, Budapest—

清 川 美也子

今回は、ハンガリーの音楽教育の親とも云うべき、コダーイ・ゾルターンと、そのコダーイが作り出した音楽教育システムの実録をくわしく調べて見ました。（使われている歌は全てハンガリーの古いわらべ歌です）

コダーイ・ゾルターンは、1882年、12月16日、ハンガリーのケチケメートに生まれました。父親は、鉄道官吏であり、ヴァイオリンを上手に弾く事が出来、母親はピアノを、これもあり上手に弾く事が出来ました。父親の職業の関係上彼は、成長期ハンガリーの国内をあちこちと移り住む生活をしいられるのです。1891年、彼が9才の時、ナジソンバトにあるローマ・カトリック教会の高等学校に通い始めて音楽を正式に学ぶのです。そこに於て、ピアノとヴァイオリンを習い、教会の聖歌隊にも入り、そして作曲も始めます。その頃の作品には、管弦楽と合唱の為のミサ曲や、アヴェマリア等があります。ケチケメートの宗教的な土地がらが、コダーイの音楽を培う素となつていわれていると思います。1900年、18才の時彼は、パーズマーニュ・ペーテル大学の哲学科に入学し、更に1年後に大学在籍のまま、ブタペスト音楽大学（現在のリスト・フェレンツ音楽院）の作曲科に於て、ハンス・ケスラーに作曲を学ぶ為に入学します。

この時期彼は、数多くの、ドイツ的室内楽曲や宗教的合唱曲を作曲しますが、彼は又、ハンガリーの国民音楽に強い関心を抱く様になり、ハンガリー古来のマジャール民謡の研究が必要と考え、1905年、23才から民謡収集活動を始めます。1907年、25才の時、ブタペスト音楽大学（現在のリスト・フェレンツ音楽院）の作曲科の教授に就任し、民謡収集活動及び研究は、作曲、教授活動と共に継続して行なわれ、それは後の彼の作曲及び教育内容へと反映して来るのです。この間、同じ道を歩む、バルトークとも親しい交流が生まれるのです。1913年に著された民謡収集に関する論文、そして1935年に出版された《ハンガリー民族音楽、MAGYAR NÉPZENE》、1951年に出版された《ハンガリー民族音楽大観、MAGYAR NÉPZENE TÁRA》は、民族音楽研究家としてのコダーイの業績を確実な物としました。又、音楽教育家としては、1925年頃から活発となり、自ら発掘したマジャール音楽に基づく音楽教育を考え出し、教材用の作品を書き、実験学校を設立し、実践、普及活動を続け、ハンガリー国内外の音楽教育に大きな影響を与えました。少しもどります

が、1923 年、ハンガリー語訳による《ハンガリー詩編》が成功、コダーイの名が世界に広まるのです。この頃の代表作に、《ハーリー・ヤーノシュ》、《ガラータ舞曲》《ミサ・プレヴィス》等があります。

彼の作風は、はじめの頃は古典的で、声楽曲では、16 世紀イタリア・ポリフォニー的要素が多く見られ、器楽曲では、フランス印象派風であるのに対し、その後、次第にマジャール音楽へ語法を、彼独自の響の中にとけ込ませて行く様になるのです。晩年には最高の指導者として国際的数々の栄誉が授けられ、コダーイ・システムを確固たるものにきずき上げ、1967 年 3 月 6 日、85 才でブタペストに於てその偉大な生涯を閉じたのでした。

コダーイの言葉

ある時、フランスのパリで開かれた国際会議においてある人が

「子供の音楽教育は何才から始めたら良いのでしょうか？」と質問すると、コダーイは「生まれる 9 ヶ月前から。」と答えたと言う事です。そして「第一印象と云うものは、非常に長く持続するのです。子供が 6 才までに聴いたものは、後になって消す事は出来ません。つまり、小学生になって始めたのでは、遅すぎるのです。子供は就学前に多くの印象を蓄えます。もし悪い印象を受けたら、子供の一生における音楽の運命は決まってしまう。」と答えたと言います。

ハンガリーの子供達は、保育園、幼稚園で 1 日で過ごします。

コダーイは

「保母に出来ることで、もっとも細心に行なわれる。家庭教育では解決できないこと、それは共同体への適応です。音楽についても、保母の役割は不可欠です。親は、最適の時期に子供の音楽上の発達に留意することは、極めて稀です。どんなに総明な母親であっても、十分な音楽教育を行いながら、これに並行して、子供に社会教育を与える事は出来ません。ところが初歩段階の音楽教育では、この社会教育が、重要な助けになるのです。」と云っています。

ハンガリーの幼稚園、保育園（3 才～6 才）の音楽教育の実際に入る前に――

この年令の子供達は、集団の中の 1 人であると言う意識が、まだほとんどありません。音楽の授業でも、みんなで一緒に遊ぶことを強制せず、自由参加の形で行なわれます。子供達の集中力や興味を長続きさせる為に、人形や小道具を使います。仲間意識が出来て来て、集団で遊べる様になって来ると、音楽的には、もっとも基礎的な感覚であるリズム感、つまり、鼓動を感じることがまずは 3 才～4 才のクラスの目標です。

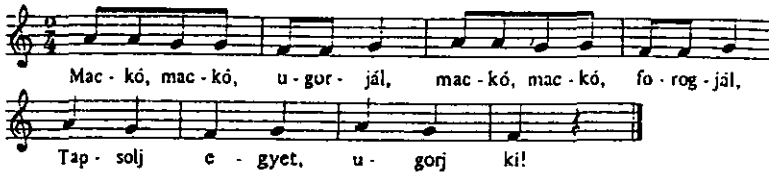
次に、5 才～6 才では――集団で遊べる様になった子供達にとって、次の課題は、保母の助けなしで歌って遊ぶこと。つまり、子供達だけで歌い、均一な拍をとり、テンポを保つことが要求されます。

さらに、拍とリズムを区別し、音の高低を感じとり、言葉に即興のメロディーをつけて歌い、そのメロディーの高低を手の上下で示します。この様に、遊び自体も複雑になってきます。

『ハンガリーの保育園における3才～6才児の音楽教育の実録』（1983年、於ブタペスト）
「3才～4才児の指導」

保母が、子供達が自由遊びをしている時に、リコーダーを吹きはじめます。

『くまさん、くまさん』
Mackó, mackó. ugorjál



Mackó, mackó, ugorjál,	くまさん、くまさん、跳び上がれ
Mackó, mackó, forogjál,	くまさん、くまさん、ひとまわり
Tapsolj egyet, ugorj ki!	手をたたけ、とびだせ!

すると、自由遊びをしていた子供達が、「あっ、これ、くまさんのうた……」と云います。保母は「良く分ったわねー。リコーダーを吹いただけで。」と褒めます。すると自由遊びをしていた子供達が保母のまわりに寄って来ます。保母は「輪になって遊びましょう」と云って子供達を輪になる様にならせます。そして「誰がくまさんになる？Aちゃんってちょうだい」と云って、子供の1人を輪のまん中に立たせます。「小さなくまさん達はどこかな？早くいらっしやい」と云って保母は、まだ遊びに参加してなかった残りの子供達を仲間に入れます。保母は「じゃあ、腰に両手を当てて」と云って、みんなに腰に両手を当てさせて、先程のくまさんのうたを、みんなで歌います。年少の幼児は、歌を完全に覚える必要はないので、保母が、一緒に歌ってあげます。彼等は集団で遊びながら、歌う喜びを感じれば良いのです。子供達は、保母と一緒に歌ったり、遊んだりしてくれる事を望みます。この事が遊びの美的、感覚的な体験を、より一層高めるのです。この様にして保母は、音楽の性格や楽しさを、子供達が身近なものに感じられる様に、表情や、動作に気をくばります。

次に、保母は「次のくまさんを選んでちょうだい。今度はBちゃん、やってちょうだい。」と云う様にして、まん中のくまさんを次々と交代させて、くまさんの歌を、くり返し、くり返し、みんなで歌いながら踊ります。

♪～くまさん、くまさん、とび上がれ

（腰に両手を当てて、体を左右にゆらし、ピョンと跳び上がる）

♪～くまさん、くまさん、ひとまわり

（腰に両手を当てて、ゆっくりと歌にあわせて歩きながら、体をひとまわりさせる）

♪～手をたたいて、とび出せ!

（手をたたいて、ヒョンと跳び上がる）

この様にして、まん中のくまさんを、次々と交代させて、同じ歌と、そのおゆうぎを、子供の数だけ、くり返します。全員がくまさんをやりおえると、今度はくまさんのお人形を与える事で、興味と集中力を持続させます。この年令の子供達は、集中力が長続きしないので、保母は新しい刺激を見つけたり、興味をひく新しい小道具を使ったりします。

保母は「くまさんを踊らせたい人はだ〜れ？」と子供達に云います。すると「わたし、わたし」と云いながら子供達が保母に寄って来ます。保母は子供の1人にくまさんの人形を与え、かんたんな踊らせ方を教え、それを踊らせる様、子供に仕むけます。そして、これも又、次々と1人1人に人形を与えて、くり返します。輪になっている子供達は、歌いながら、さきほどの踊りをくり返します。保母は、そのたびに、ほめて上げます。

子供達の集中力が弱くなって来ると、保母は別の歌にします。でんでん虫は、いつでも、子供達の興味をそそります。

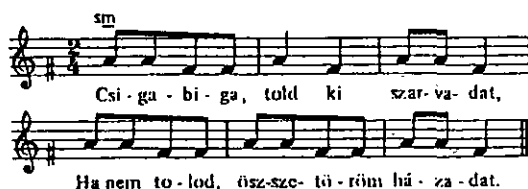
保母は、そばのカゴの中からでんでん虫の人形をとり出して「今でんでん虫は、何をしているの？」と子供達に聞きます。子供達は、興味しんしんで、目を輝かせています。

保母は「でんでん虫に、呼びかけてみましょう。きれいに呼ぶと、つのを出すわよ。」と云います。

保母は態度や、身振り、接し方を、子供達の年令に合わせます。又、子供達の理解力、仲間作りの欲求や、活動のレベルに最も適した、そして、子供達に近ずける形態を探します。保母から離れて遊んでいる子供達も、注目はしていますし、無意識にメロディーを口ずさんでいます。歌を聴きながら、他の事をしたり、背をむけていたりしますが、実は完全な音楽活動をしているのです。それは、この様にしても、歌に興味を持ち、歌に心を奪われているからです。

『でんでんむし』

Csigabiga, told ki



Csigabiga, told ki szarvadat.

Ha nem tolod, összetöröm házadat.

でんでんむしむし、つのを出せ

出さなかったら、

おまえのうちをつぶすぞ

保母は「Cちゃん、でんでんむしのツノを出してみましょうか？」と云って、Cちゃんにでんでんむしの人形をわたします。



しっぽを押すと前からツノがどんどん長く出て来るしかけのしてある、かんたんな人形。

簡単なメロディーの歌を何回もくり返すうのは、年少の子供達は、

くり返しが必要だからなのです。忍耐の木は、後になってから実をつけるのです。子供達の注意は、ふとした事でありますが、歌をくり返しうたっていると、注意が散漫になっても、又、歌に引き寄せられて来るのです。歌いながら、でんでんむしのツノを出す遊びは、子供達みんなが、やりたがります。

歌がやむと子供達は又、つみ木やら、おままごとやら、好きな事をして遊び出します。次に保母は、又次の歌をうたい出します。

『つぶす、つぶす、けしの実を』
Töröm, töröm a mákot'



Tü - röm, tü - röm a má - kot, sü - tők ne - ked ka - lá - csot.
I - ca, tol - la, mo - tol - la, ülj esen - de - sen!

Töröm, töröm a mákot.
Sötök neked kalácsot.
Ica, tolla motoilla,
Dalolj szépen katika!

つぶす、つぶす、けしの実を
あなたに菓子パンを焼いてあげる
イツァ、トラル、モトルラ、
きれいに歌って、カティちゃん

としてうつわと、すりつぶす棒を、子供に与えて、歌に合わせて、ケシの実をつぶす動作をさせます。これもくり返し、くり返し子供達を交代させてやらせ、みんなで歌います。

保母は、子供達の遊びの中に入って行き、それぞれの子供のアイデアを、うまく受け入れてそれを活用します。

ここでは、ケシの実をつぶす事を、均等な鼓動を感じさせる為に利用します。

遊びの動作が、歌の連続した鼓動をより強調します。鼓動を長時間でも感じ続ける能力を形成しなければなりません。

この為に、歌を何回も何回も、くり返し続けます。動作と遊びを関連させ、子供達の模倣したい気持を高めます。その動作に、「行為の意義」が与えられたら、子供達は、どのような遊びの状態にもひた切り切でしょう。

子供達は音楽をする事で、ただ、音楽を学ぶだけでなく、歌う事で解放され、緊張がとけ、仕事人の関心を持つ様になり、規律正しい事にも慣れ、そして仲間意識がはぐくまれます。

子供達は、自分自身が歌っていない時でも、歌を楽しんで聴き、意識を払っています。音楽になるべき興味を早く持たせるのです。機械による音楽は決して与えません。なぜなら本当の経験というものは、生で聴く音楽や、楽器の演奏なのですから。

次に保母は、両手で2つの人形をおどらせながら、ゲルゲイと小羊のお話のうた「ちぢれ毛の小羊」と云う歌を、うたってきかせます。

『ちじれ毛の小羊』

Bidres-bodros bárány



Bidres-bodros bárány, szalag van a lábán.	ちじれ毛の小羊、足にはリボン
A nyakában csengő, vezetgeti Gergő.	首には鈴、ゲルゲーが連れている
Ugy sétál a bárány.	小羊はまるで
mint egy kis, királylány.	王女様のように散歩する
Kényeskedő fajta: új ruha van rajta.	取り澄まし、新しい服を着ている
Gergő se akárki! Ő meg a királyfi.	ゲルゲーだって普通の人ではない!
	彼は王子様、
Skincse, királysága:kicsi báránykája.	そして彼の宝、王国は小さな羊

子供達は目を輝かせて、じっと聴きいっています。そして保母は、「小羊はどうだった？」と子供達に聞きます。子供達は「ちぢれ毛」と答えます。

自由遊びの時でも、子供達は、みんなで一緒に聴いた歌を思い出して、歌いながら遊んでいます。

小羊や、ゲルゲイの人形を手にとって、それぞれ勝手に、その歌をうたいながら遊んでいます。

言葉のついてる歌は、音楽だけで影響を与えているわけではありません。歌詩は、言葉を意識化する基礎作りの為に、著しい効果があります。歌の中に生きている、多分野の言葉の宝を、幼い年令に植えつけ、そして、メロディーに助けられて、これを一生定着させることは、言葉の乱れを防ぐ為の最大の防御となるのです。

さて、こちらでは、女の子が絵本を見ながらまるで本を読んでいるかの様に、ちんぷんかんぷんの言葉を朗読しています。ハンガリー語の持つ抑揚とリズムを真似し、その中で、ごろ合せの言葉を

見つけ、そのユーモアと創作のよろこびを楽しんでいます。

子供達は、言葉の意味を考えなくても、遊びを充分に享受します。極彩色の砂のような音楽の万華鏡を楽しんでいるのです。

「5～6才児の指導」

「♪おだんごが、ナベからとび出した

その後を粉ひきがナベを持って追いかけた

もってもって、追いかけた♪」

保母がとなえながら先頭になり、みんなで手をつなぎ、列になって、まるく輪になり、円を作る。

そして一方向を向いて、両手で自分の体の側面をかるくたたきながら、円のおりに前進します。

保育園の3年間で、子供達は大きく発達します。子供達だけでも、清潔に歌う事が出来、テンポを保つ事が出来、メロディーを考え出す事が出来、自分達だけでも、均一な鼓動を感じる事が出来る様になれば、年上の幼児に対しては、あまり助ける必要はありません。

音楽は、その要素の1つずつを取っても教育手段として有効です。リズムは、注意力、集中力、決断力、行動反射能力を養います。メロディーは、感情の世界に心を開かせます。音の大きさの変化と音色が、聴覚器官を鋭くします。歌う事は、とても多くの分野における身体活動であり、身体発育への影響も計り知れないものがあります。

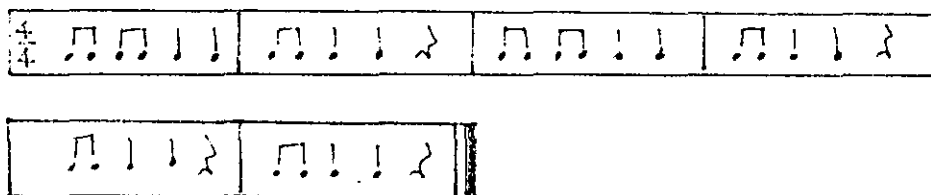
〔図 A〕



次に保母は子供達の前で、歌いながら音の高さを片手で表現します。（図 A）そして子供達に、その通りやらせてみます。それが良く出来るとほめて上げます。

さて次はリズムです。

先程のおだんごの歌をとなえながら、みんなで手をたたき、リズムを取り、お休みの拍を、はじめはヒザを、次はカタをたたきます。



全員が良く出来る様になるまで何度もくり返し、出来る様になると、ほめて上げます。

次に保母は、「かくれろ、かくれろ、緑の枝で遊びましょう。」と云います。

『かくれろ、かくれろ、緑の枝』

Bújj, bújj, zöld ág



Bújj, bújj, zöld ág,
zöld levelecske!
Nyitva van az aranykapu csak
bújjatok rajta.
Rajta, rajta, leszakadt a pajta.
leszakadt a pajta.
bennmaradt a macska.

かくれろ、かくれろ、
緑の枝、緑の葉っぱ
黄金の門は開いている、
くぐってごらん
くぐれ、くぐれ、納屋がつぶれた
納屋がつぶれた、
中にねこが残った

子供2人が両手を高く上げ、向き合ってつなぎ、門を作ります。門を作った2人は、2人で2人だけの秘密の言葉を決めます。残りの子供達は数珠繋ぎに手をつないで、歌いながら門を、くぐって行きます。歌が終った所で、門が、スッと下がり、2人の子供を、つかまえます。その2人に対し、門になった2人がそれぞれ、その前に決めておいた秘密の言葉のどちらかを、つかまえた2人にそれぞれ選ばせて、それぞれの言葉の門の1人のうしろにつかせます。門になった子供の腰に両手を置き、つながります。言葉はその度ごとに門になった2人が秘密に決めます。これを、くり返すうちに、2人の門のうしろには、それぞれ長い列が出来ます。そうなった所で、2つの列が、ひっぱり合いをして勝負を決めるのです。みんな目を輝かせて、興奮ぎみに楽しめます。

5～6才の子供達は、自覚、自主性があり、なんでもやって見ようと云う気持ちがあります。そして集団の遊びを求めます。

子供達は、わらべ歌の変化の多い遊びの型を喜びますし、思考力や創造力を試される事を好みます。コダーイは遊びの重要性を何度も強調しています。

遊びの人間性に与える価値は多大です。共同感覚と、生きる喜びが増します。現代の子供達が、早熟な事に対して良い事はありません。ハンガリーでは、小学校に入った子供達はもう遊びが自分に適しているとは思っていません。これをこのままにしていけないのです。大きい子供達でも、やる気にさせ、充分やる気になったら、遠慮をさせない様にします。子供の時代が長ければ長い程、それだけ調和のとれた人生を送る事が出来るのです。子供の音楽に対する運命は3才〜7才で決定されてしまいますので、その時期に、干渉しなければならないのです。保母の仕事は、レベルが高く、複雑なので、多分野にわたる学習と、趣味の良い感覚が必要となります。すばらしい保母が居たら、音楽の上でも、子供に奇跡を行う事が出来るのです。子供は教える人が居れば、何でも学んでしまいます。

次に保母が1人で未亡人のアヒルと云う歌を歌ってきかせます。

『未亡人のあひる』

Kácsa, kácsa, özvegy kácsa,



Kácsa, kácsa, özvegy kácsa,
ki a párját nem találja,
keresen magának!

あひる、あひる、未亡人のあひる
相手をみつけられないのは 誰
自分で見つけなさい！

次に子供達を円になる様に立たせます。そして未亡人のアヒルをみんなで歌い、歌が終わったとたんにそれぞれ相手をみつけさせ、手をつながせます。「相手を見つけれないのはだあれ？自分で見つけなさい。」と保母は云います。「相手を見つけれない！」と保母が云うと、子供達は目を輝かせて走って相手を見つけ、手をつなぎます。保母は又云います。「ひとりぼっちで、残った人は、ぶきつちよな人です。上手に相手を見つけれられるかな？歌を知っている人は、私と一緒に歌って下さいね。」そしてみんな一緒に未亡人のアヒルを歌い出します。そして全員が覚えてしまうまで何度も歌をくり返します。子供達は新しい歌をすぐに覚えてしまいます。それは遊びに興味があり、動きを伴うからです。保母が云います。「さいしょ、私が1人ぼっちの未亡人のアヒルになります。手をつないで、少し斜めになって、さあ、歌をうたいましょうネ。自分で見つけなさいと云ったら、みんな相手を見つけて、つかまえるのよ。」子供達は手をつないで円形になり、少し斜めになって前進しながら未亡人のアヒルを歌います。歌の終わった所で子供達は、走って相手を探します。保母

は「相手のいない人はだあれ？見てみましょう。アッ、未亡人のアヒルさんがここに1人いるわね。あなたは動かなかったでしょう？あなたも、みんなの様に走って誰か相手を探して、つかまえてね。」と云って、その1人の子供を円のまん中に立たせて、残りの子供を円にして、未亡人のアヒルを歌わせながら斜め前進させます。又歌が終った時点で子供達は走って誰か相手を探して手をつなぎます。相手を見つけられなかった子供が新しい未亡人のアヒルになり、次回円のまん中に立ちます。相手を早く見つける事は、器用さの為の試みですし、友達を見つける為の可能性にもなります。何度も何度もこの遊びをくり返します、その間、保母も未亡人のアヒルになります。こうして保母も、子供達と一体となり、子供達は目を輝かせて、この遊びに興じます。

遊びのついたわたべ歌は、民俗音楽の太古を最も深く垣間見る事が出来ます。動作や身振りを伴う歌は、ただの歌よりも、はるかに古いと同時に複雑です。子供達が、まだ自由に行っている、ナイーブで原始的な遊びの本能は、大人の音楽の世界では、もうほとんど失なわれています。子供達は、数種の単純な基本型に、創造と工夫によって何千もの衣を着せ、生々とした人生を送ります。

未亡人のアヒルの遊びは、その後何度もくり返す事により遊びの喜びが増大し、テンポが上り、声が大きくなって行き、気分が高揚し子供達が十分に満足するまでくり返されます。そしてその後、保母は次の遊びへと子供達を導いて行きます。保母が「♪外は寒い、鳥が寒がっている〜♪」と歌い前出の図 A で託した様に、子供達に手で音の高低を表わさせます。メロディーを空間に示すのは、音の高低を感じさせることで、これによって、小学校で受ける学習の準備が行なわれるのです。次に保母は、それぞれの子供に、1つの簡単なフレーズのメロディーの歌を作らせて歌わせてみます。それぞれをほめてあげ、みんなでそれぞれのメロディーの歌をうたいながら、その音の高低を先ほどの図 A の様に手で示させます。次に保母はくるみはおいしいと云う歌を、みんなで、手で音の高低を示させながら歌わせます。

『くるみはおいしい』 "De jó a dió!"

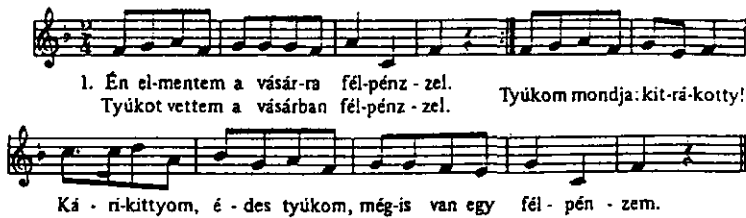


1. "De jó a dió!" fűtyűl a rigó. 『くるみはおいしい』と、つぐみが鳴く
Vidám dala száll: 楽しい歌が飛び交う、
élni, jaj de jó! 生きるのは何て楽しいんだ
2. Gyere te rigó, itt van a dió: おいで、つぐみ、くるみがあるよ
Héja ropogo, bele csuda jó. 殻はバリッとしているし、中身はおいしい

次に1人1人にそれをやらせて、みんなで拍手をして、ほめたたえます。次に、みんなでヒザをたたきながら拍子をとって歌います。色々なリズムの取り方もしてみます。次に保母は、1人の子供にシンバルを渡し、もう1人の子供に太鼓を渡し、2人にそれぞれ少々違うリズムの取り方を教え、残りの子供達とくるみはおいしいを歌いながら、シンバルを持った子供と、太鼓を持った子供に同時にそれぞれ違うリズムの取り方で、シンバルと太鼓を拍子にあわせて鳴らさせます。シンバルは同じ速さの拍を、太鼓は歌のリズムを叩きました。保母は「よ〜く出来たわね」と云ってほめてあげます。これも又、次々と子供を交代させてやり、みんなでほめたたえます。次に保母は市場へ半文もって出かけたを歌ってきかせます。

『市場へ半文もってでかけた』

En elmentem a vásárra félpénzzel



- 1 En elmentem a vásárra félpénzzel.
Tyúkot vettem a vásárban félpénzzel.
Tyúkom mondja: kitrákotty!
Kárikittyom, édes tyúkon
mégis van egy félpénzem.
- 2Csirkét vettem.....
Esirkém mondja: csip, csip, csip.
Tyúkom mondja.....
- 3disznót vettem.....
Disznóm mondja: rof, rof, rof.
Csirkém mondja:
- 4kecskét vettem.....
kecském mondja: mékk, mékk.....
- 5bárányt vettem.....
Bárány mondja: bee, bee, bee,
- 6kutyát vettem.....
kutyám mondja: van, van, van,
- 7 En elmentem a vásárra félpénzzel.
Macskát vettem a vásárban félpénzzel.
Cicám mondja: mian
Kutyám mondja: van van
Bárány mondja: bee, bee, bee
Kecském mondja: mekk mekk mekk
Disznó mondja: ruf, ruf, ruf
Csirkém mondja: csip, csip, csip
Tyúkom mondja: kitrákotty
Kárikittyom édes tyúkom
Elfogyott a félpénzem

- 1 市場へ半文もってでかけた
市場でめんどりを半文で買った
めんどりはコケッコッコー!
コケッコッコー
私のめんどり、まだ半文ある
- 2 ひよこを買った.....
ひよこはピヨピヨピヨ
めんどりは.....
- 3 ぶたを買った.....
ぶたはブーブーブ
ひよこは.....
- 4 山羊を買った
山羊は、メーメー
- 5 小羊を買った
小羊は、ベーベーベー
- 6 犬を買った
犬は、ワンワンワン
- 7 市場へ半文もってでかけた
市場でねこを半文で買った
ねこはニャー
犬はワンワン
小羊はベーベーベー
山羊はメーメーメー
ぶたはブーブーブー
ひよこはピヨピヨピヨ
めんどりはコケッコッコー
コケッコッコー私のめんどり
なくなってしまった私の半文

子供達は心をおどらせ、目を輝かせて、キャッキヤと笑いながら喜こんで聴き入っています。子供達は保育園の生活を通して、系統的な音楽教育を受け、音楽に親しむ様になります。歌を聴くだけでなく、雰囲気の変化するのを追い、心で美しさを感じられる様になります。これは一生を決定する経験となるのです。保母は又、別の歌を歌ってきかせます。

アールシェールシュの小鳥です。

『アールジェールシュの小鳥』

Az árgyélus kis madár



1. Az árgyélus kis madár nem száll minden ágra,
Én sem fekszem mindenkor szép paplanos ágyba.
Szállj le, szállj le, gyönges kis madárka,
Szánj meg, bánj meg, gyönges kis madárka!

Az árgyélus kis madár
nem száll minden ágra,
Én sem fekszem mindenkor
szép paplanos ágyba.
Szállj el, szállj el,
gyönges kis madárka,
Szállj el, szállj el,
gyönges kis madárka!

Az én kedves vacsorám
csak egy piros alma.
Az én vetett nyoszolyám
csak egy marék szalma.
Szállj el, szállj el,

アールジェールシュの小鳥は
すべての枝に 飛んで行くわけではない
私も羽布団のベットに
いつも寝るわけではない
飛んで行け、飛んで行け、か弱い小鳥よ
飛んで行け、飛んで行け、か弱い小鳥よ

私の夕食は たったひとつのりんご
私のベットは ひとつかみのわら
飛んで行け、飛んで行け、か弱い小鳥よ

この3才～6才児の教育の実態は、ハンガリーにおいて1983～1987年の間に実際に行なわれた教育の記録です。そして使われている歌は全てハンガリーのわらべうたです。

コダーイは――

音楽は、みんなのものです、その為に私達は何が出来るとでしょうか？子供達の感受性と創造意欲

が、何年も耕やされないままにいるという事がなければ、外国語の様に、苦勞して音楽の母国語を学ぶことなく、幼い頃からその中で自然に生活出来れば、ハンガリーの歌の響きが、より豊かに変る事が出来、ハンガリー文化の大切な分野に、確固たる基礎が築かれることになります。保育園と、そして、その中で音楽に関わることは、副次的で、ちっぽけな問題ではなく、国を造る上での問題となって来ます。ある人々にとって音楽が喜びでないならば、その人々は完全に幸せな人々であるとは言い切れないでしょう。——

と述べています。

〈洋 書〉

- BICINIA HUNGARICA
BEVEZTO A KETSZOLAMU ENKLESBE HARMADPK FUZET
 KODALY ZOLTAN 著 EDITIO MUSICA, BUDAPEST
 1941 年
- ZENEI ELOKEPZO I OLVASKONYV
 JOZSEF ANDRASNE 著 EDITIO MUSICA, BUDAPEST
 1971 年
- ZENEI ELOKEPZO II MUNKA FUZET
 JOZSEF ANDRASNE 著 EDITIO MUSICA, BUDAPEST
 1971 年
- 55 KETSZOLAMU ENKGYAKORLAT
 KODALY ZOLTAN 著 ZENEMUKIADO, BUDAPEST
 1972 年
- 44 KETSZOLAMU ENKGYALORLAT
44 ZWEISTIMMIGE SING-UBUNGEN
 KODALY ZOLTAN 著 EDITIO MUSICA, BUDAPEST
 1954 年
- 33 KETSZOLAMU ENKGYAKORLAT
33 ZWEISTIMMIGE SING-UBUNGEN
 KODALY ZOLTAN 著 EDITIO MUSICA, BUDAPEST
 1954 年
- ENEKEL JUNK TISZTAN
 KODALY ZOLTAN 著 ZENEMUKIADO, BUDAPEST
 1968 年
- TRICINIA TRICINIA 28 HAROMSZOLAMU ENKGYAKORLAT
28 DREISTIMMIGE SING-UBUNGEN
 KODALY ZOLTAN 著 EDITIO MUSICA, BUDAPEST
 1954 年
- 22 KETSZOLAMU ENKGYAKORLAT
22 ZWEISTIMMIGE SING-UBUNGEN
 KODALY ZOLTAN 著 EDITIO MUSICA, BUDAPEST
 1965 年
- TRICINIA ZENEMUKIADO VALLALAT
 KODALY ZOLTAN 著 ZENEMUKIADO, BUDAPEST
 1963 年
- EPIGRAMMAK
 KODALY ZOLTAN 著 ZENEMUKIADO, VALLALAT, BUDAPEST
 1958 年

EPIGRAMMAK EPIGAMME

KODALY ZOLTAN 著

EDITIO MUSICA, BUDAPEST

1954 年

ZENE MINDENKIE

KODALY ZOLTAN 著 FORRAI KATALIN 監修

PANNŌNIA FILMSTUDIO

& KULTURA, BUDAPEST

1983 年

〈和 書〉

なんのよき日よ

コダーイ芸術教育研究所編

全音楽譜出版社

わたしゃ うたずき

コダーイ芸術教育研究所編

全音楽譜出版社

1973 年

わらべうたの課業と計画

コダーイ芸術教育研究所編

明治図書出版株式会社

1977 年

コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践

中川弘一編、訳

全音楽譜出版社

1980 年

わらべうた・音楽（保育園の指導の方法論）

コダーイ芸術教育研究所著

明治図書出版株式会社

1982 年

保育園、幼稚園の音楽（わらべうたの指導）

コダーイ芸術教育研究所著

明治図書出版株式会社

1975 年

ハンガリー音楽教育

シャンドル・フリジェン著 羽仁協子編、訳

音楽之友社

1968 年

ハンガリーの音楽小史

ソボールツイ・ベンツェ著 谷本一之訳

音楽之友社

1981 年

おながく（わらべうたによるソルフェージュ）1、2、3、4 巻

コダーイ芸術教育研究所著

全音楽譜出版社

1972 年

おつかんよ

コダーイ芸術教育研究所著

全音楽譜出版社

1976 年

コダーイシステムによる音楽指導の実際

羽仁協子著

全音楽譜出版社

1981 年

コダーイ・システムとはなにか

カタリン・フォーライ、セーニュ・エルジェーベト著

全音楽譜出版社

1975 年

ハンガリー教育原理の基礎

トルダ・イロフ著

明治図書出版株式会社

1986 年

音楽はみんなのもの・コダーイの音楽教育

幼稚園・保育園

コダーイ・ゾルターン著

カタリン・フォーライ監修

Pannōnie FILMSTUDIO &

KULTURA, BUDAPEST

1983 年

「コダーイの音楽教育」

1989 年